

様式第 2 (第12条関係)

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況 (内規第 11 条 活動報告)

団体名	和	国際天文学連合
	英	International Astronomical Union (略称 IAU)
	団体 HP (URL)	http://www.iau.org/ (日本学術会議が加盟していることの記載 ☒ 有 ・ 無)
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)		(1) 新たな発見による社会へのインパクト： ガンマ線から可視光を経て電波にいたる電磁波、ニュートリノや宇宙線などの(素)粒子の2つに加えて、人類が宇宙を見る第3の目を獲得したことが、2016年2月11日の重力波の検出報告により明らかになった。この重力波天文学の創始に加え、ビッグバンからわずか4億年後の宇宙にある銀河の発見、銀河系の詳細な三次元地図を作るための10億個の星の精密観測の開始、2000個を超える太陽系外惑星の発見と第二の地球探しなどに象徴されるように、天文学は近年めざましい進歩を続け、一般社会や若い世代に大きなインパクトと知的刺激を与えている。 (2) 世界的普及活動キャンペーン： 発見が続く太陽系外惑星系に名前を付ける公開キャンペーンを行った。まず、IAUに登録した世界のアマチュア天文クラブから公募して命名対象とする20の太陽系外惑星系を決め、それぞれに複数の名前候補を募った。20の惑星系のうち7つは日本の研究者が発見したものである。ついで、世界の誰でも参加できるインターネット投票により19惑星系の名前を決定して、2015年12月15日に公表した。日本からは学校のクラブ等が非常に多数参加した。日本のクラブが提案した名前が4個採択された。なおこれは、はじめて一般の人が参加した天体の命名である。 (3) 組織の全面的改革 2012年の北京総会で従来の12のDivisions(部会)を天文学の進歩に合わせて9個に再編成を行い、その後3年をかけて各Divisionの下Commissions(委員会)の全面的な見直しを行った。2015年のホノルル総会で既存の40のCommissionsを全て廃止し、会員の提案を基本にした35の新Commissionsが発足した。これにより2017年開催のIAUシンポジウム(年間9個を採択・支援する)への提案が過去最高の36個となるなど、IAUの活動が活発化された。 (4) 設立100周年と個人会員の活動 IAUは1919年に設立され、2019年に創立100周年を迎える。日本は設立当初からのメンバーである(ベルギー、カナダ、フランス、イギリス、ギリシア、日本、アメリカで発足を決めたが、イタリアとメキシコがすぐに加わった)。現在IAUは世界の74の国と地域が加入する、天文学を代表する唯一の国際学術団体である。他の多くの国際学術団体と異なり、IAUは「国/地域会員(National Member)」と「個人会員(Individual Member)」の二種の会員を持っている。IAUの財務を支えるのは「国/地域会員」であるが、IAUの極めて活発な活動は、

様式第 2 (第12条関係)

	分野やテーマ毎に部会、委員会、ワーキンググループなどを構成する個人会員に支えられている（「国/地域会員」に活動への参加義務が課せられることはない）。
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について	IAU は、学術の国際団体としては殆ど唯一、研究だけでなく教育・普及活動を継続的に発展させている団体である。その活動は 1 万 1 千名の個人会員により、強力に支えられている。 (1) OAD (IAU Office of Astronomy for Development : 「発展のための天文学」 オフィス) http://www.astro4dev.org/ IAU は天文学を研究・教育・普及の面から開発途上国の社会発展に役立てる「発展のための天文学」10 年計画を、2009 年リオデジャネイロ総会で採択した。活動の中心となる OAD は、南アフリカ政府の協力を得て南アフリカ天文台に設置された。毎年の国際プロジェクトの募集・実施、世界 6 か所に及ぶ地域センター (Regional Node) の設置など発展途上国に向けた OAD の活動の成果はめざましいものがあり、10 年の期限を超えて活動を継続することが、ホノルル総会で決まった。その活動に関し、2016 年の Edinburgh Medal が Kevin Govender (OAD の director) と IAU に対して授与される。 (2) OAO (IAU Office for Astronomy Outreach : 天文普及活動オフィス) IAU が始めた世界的な天文学普及活動である。大成功を収めた世界天文年 2009 のキャンペーンを受け、2012 年に日本の国立天文台の協力を得て、三鷹に設置された。IAU では、アジアにおける最初の本格的支援活動でもある。世界のアマチュア天文家のネットワーク作りを中心に、国際光年を含むさまざまな天文イベントの組織、星空の保護、太陽系外惑星命名キャンペーン、などに活発に取り組んでいる。三鷹の国立天文台天文情報センター普及室をはじめ国内の天文普及グループと極めて密接に協力し、相互に大きな刺激と活力を与えあっている、 (3) OYA (IAU Office for Young Astronomers) IAU が長年組織してきた International School for Young Astronomers (ISYA) を支え若手天文学者を支援する新しいオフィス (OYA) を、ノルウェー科学アカデミーの協力により、オスロに開設した。(若手研究者の稿に詳述)
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて	・日本は IAU 発足時 (1919) からの創立メンバーで、戦前では平山信氏、戦後では萩原雄祐氏、海部宣男氏が、副会長を務めた。 ・古在由秀氏は、1988-1991 年の IAU 会長を務めた (アジア初)。 ・海部宣男氏 (22 期会員、現連携会員 ; 第 3 部) は、2012-2015 年の間会長を務め、委員会組織の刷新、「発展のための天文学」10 年計画の推進などを指揮した。また、IAU のアウトリーチを担当する IAU Office of Astronomy Outreach (OAO) を日本の国立天文台内に設置した。上述の太陽系外惑星の命名活動は、この IAU OAO が中心になって展開した。太陽系外惑星の命名プロジェクトへの日本の参加は、大きな貢献となった。海部氏は現在も執行部の一員で、IAU のアドバイザーである。

様式第 2 (第12条関係)

加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への効果やメリットについて	・日本学術会議が事務局を務めるアジア学術会議が ICSU の地域準会員の資格を得るために必要であった「Union 会員の賛同」(3 Unions から必要) に関して IAU は OAO にも言及した強力なサポートレターを送るなど、日本学術会議の世界的プレゼンスを支える Union の一つである。 ・IAU は、3 年に一度、持ち回りで総会 (IAU-General Assembly) を開催している。開催年に行われる 9 つの IAU シンポジウムの内 6 つのシンポジウムと 20 余のワークショップが総会を含んで 2 週間にわたり同一会場で開催される。この IAU 総会は、毎年組織される 9 つのシンポジウムと併せ、若手を中心に我が国の天文学者の重要な交流・研鑽・研究推進の場となっている。 ・IAU は地域の天文学を推進する立場から、アジア太平洋地域会議 (APRIM)、ラテンアメリカ地域会議 (LARIM)、および中東アフリカ地域会議 (MEARIM)、の 3 つの地域会議 (Regional IAU Meeting: RIM) をそれぞれ 3 年に一度開催している。中でもアジア太平洋地域会議は急速に活動性と重要性を増しており、日本がアジア地域における天文学の共同とリーダーシップを強化していく上で欠かせない舞台である。 ・日本天文学会、日本物理学会、日本地球惑星科学連合など日本の関連学会の多くの会員が IAU 会員となって、円滑な国際協力のもとで研究を進めている。その結果として国際的にも高く認知されている日本の天文学の研究成果が頻繁にマスメディアなどで報道され、国民に対して良い文化的影響を与えている。
その他(若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など)	・IAU は 1967 年以来ほぼ毎年、International School for Young Astronomers (IYSA) を主として発展途上国で開催している。IYSA では世界トップレベルの講師陣が約 2 週間にわたって、講義、セミナーと演習、観測などを教授し、若手の視野と経験を広げる多様な活動が展開されている。2015 年には IYSA を専門に担当する IAU Office for Young Astronomers (OYA) をオスロに開設し、さらなる安定的発展を目指している。 ・2003 年のシドニー総会で IAU Women in Astronomy Working Group が設立され、以降 3 年毎の総会時に毎回会合を開いて、若手に対する指導助言 (mentoring) も含めて女性研究者のキャリア支援を行っている。 ・IAU の規則 (Working rules) には、ICSU の定めた不差別の規則、"Freedom, Responsibility and Universality of Science" に従うことが明記されている。 https://www.iau.org/administration/statutes_rules/working_rules/ それ故、総会やシンポジウムなど IAU が関係する全ての活動において、人種、宗教、国籍、言語、政治や思想信条、性別、性的指向、障害、あるいは年齢などに基づく差別やハラスメントに反対することが「IAU の科学会議の開催規則とガイドライン」の冒頭に記述されている。

様式第 2 (第12条関係)

	https://www.iau.org/science/meetings/rules/
--	---

2 今後の予定について (内規第 11 条 活動報告)

総会、理事会の日本開催の予定について (招致等の予定も含め)	1997 年に第 23 回総会を京都で開催、海部宣男会長時代の 2013 年に執行委員会 (理事会) を奈良で開催したので、当面、日本で総会あるいは理事会を開催する予定はない。
日本人の役員立候補等の予定について	国のバランスを保つという IAU の方針により、海部宣伝氏が会長予定者、ついで会長であった過去 6 年間は、日本から役員が選出されることがなかった。しかし海部会長が 2015 年で任期満了となったため、2018 年のウィーン総会で選出される役員の候補者について IAU 分科会で議論を開始したところである。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて	個人会員の中に、研究者会員とアウトリーチ関連の活動をする会員 (現在は “associate member” の資格となっている) の二種を設けることを提案してはどうかとの議論を始めている。

様式第 2 (第12条関係)

3 国際学術団体会議開催状況 (内規第 11 条 活動報告)

総会・理事会・各種委員会等の状況 (過去 5 年間及び今後予定されているもの)	総会開催状況	2015 年 (開催地: ホノルル)、2012 年 (開催地: 北京)、 2009 年 (開催地: リオデジャネイロ)、2006 年 (開催地: プラハ)		
	理事会・役員会等開催状況	2015 年 (開催地: ホノルル EC96/97)、2015 年 (開催地: パドバ EC95)、 2014 年 (開催地: キャンベラ EC94)、2013 年 (開催地: 奈良 EC93)、 2012 年 (開催地: 北京 EC91/92)、2012 年 (開催地: パリ EC90)、 2011 年 (開催地: プラハ EC89)、2010 年 (開催地: ボルチモア EC88)、 2009 年 (開催地: リオデジャネイロ EC86/87) (EC: Executive Committee)		
	各種委員会開催状況	2015 年 (開催地: ホノルル)、2012 年 (開催地: 北京)、 2009 年 (開催地: リオデジャネイロ)、2006 年 (開催地: プラハ)、 2003 年 (開催地: シドニー)、2000 年 (開催地: マンチェスター)、 1997 年 (開催地: 京都)、1994 年 (開催地: ハーグ)、 1991 年 (開催地: ブエノスアイレス)、1988 年 (開催地: ボルチモア)、 各種委員会は、基本的には総会時に合わせて開催される。		
	研究集会・会議等開催状況	2016 年 (開催地: トレド IAUS321)、2015 年 (開催地: ホノルル IAUS320)、 2015 年 (開催地: ホノルル IAUS319)、2015 年 (開催地: ホノルル IAUS318)、 2015 年 (開催地: ホノルル IAUS317)、2015 年 (開催地: ホノルル IAUS316)、 2015 年 (開催地: ホノルル IAUS315)、2015 年 (開催地: アトランタ IAUS314)、 2014 年 (開催地: ガラパゴス IAUS313)、2014 年 (開催地: 北京 IAUS312)、 2014 年 (開催地: オックスフォード IAUS311) (IAUS=IAU Symposium)		
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定		2015 年 第 29 総会 (ホノルル)、161 人 (代表派遣: 岡村定矩、山岡 均) 2012 年 第 28 総会 (北京)、127 人 (代表派遣: 岡村定矩、渡部潤一、大石雅寿、吉川真) 2009 年 第 27 総会 (リオデジャネイロ)、65 人 (代表派遣: 岡村定矩、福島登志夫) 2006 年 第 26 総会 (プラハ)、140 人 (代表派遣: 海部宣男、岡村定矩)		
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況 (過去 5 年)	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別
	アドバイザー	2015～2018	海部宣男	(23 期) 会員・連携
	決議策定委員	2015～2018	福島登志夫	(22 期) 会員・連携

様式第 2 (第12条関係)

	会長	2012～2015	海部宣男	(23 期) 会員・ 連携
	第 22 委員長	2009～2012	渡部潤一	(期) 会員・連携
	特別指名委員	2006～2009	岡村定矩	(23 期) 会員 連携
	財務委員長	2006～2009	福島登志夫	(22 期) 会員 連携
	第 VIII 部会長	2006～2009	岡村定矩	(23 期) 会員・ 連携
出版物	1 定期的 (年 2-4 回) 主な出版物名 IAU E-Newsletters			
	2 不定期 (年約 9 回) 主な出版物名 Proceedings of the IAU Symposium			
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 (http://www.iau.org/publications/e-newsletters/)				

様式第2 (第12条関係)

4 国際学術団体に関する基礎的事項 (内規第3条、4条、5条)

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	日本学術会議物理学委員会 IAU 分科会
	委員長名	岡村定矩
	当期の活動状況	(開催日時 主な審議事項等) 2014年12月22日ー第1回 委員長・副委員長の選出、活動方針、IAU新会員の推薦 2015年5月18日ー第2回 ホノルル総会へ向けて 2015年9月14日ー第3回 ホノルル総会まとめと報告 2015年12月28日ー第4回 太陽系外惑星命名キャンペーン報告 2016年3月2日ー第5回 会員メールアドレス調査結果
内規第3 (国際学術団体の要件関係)	国際学術交流を目的とする非政府のかつ非営利的団体である ☒ 1. 該当する 2. 該当しない ※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 (http://www.)	
	各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている (主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か) ☒ 1. 該当する 2. 該当しない ※根拠となる資料の添付又は URL を記載 (http://www.iau.org/administration/statutes_rules/)	
	下記の事項 (ア～エ) のいずれか一つに該当するか (該当するものに○印) ☒ ア 個々の学術の専門分野における統一的かつ世界的な組織を有するもの イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一的かつ世界的な組織を有するもの ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの	
	10カ国を超える各国代表会員が加入している ☒ 1. 該当する 2. 該当しない	

様式第 2 (第12条関係)

	加入国数及び 主要な各国代 表会員を 10 記載	(74 ヶ国)
		・各国代表会員名／国名 Lynne A. Hillenbrand/アメリカ合衆国 Christine Wilson/カナダ Martin Adrian Barstow/連合王国 (英国) Matthias Steinmetz/ドイツ Céline Reylé/フランス Lex Kaper/オランダ Xiangping WU/中華人民共和国 Hyesung KANG/韓国 Chanda J. Jog/インド Stuart Wyithe/オーストラリア